

# 深遠なる英語の世界に戯れてこそ「英語力」は自ら育つ

名門中学・高校の生徒が数多く通い、東大合格率80%超と高い実績を誇る平岡塾。合格実績もさることながら、受験のための英語ではなく、本物の英語力を身につけられることが高評価につながっている。生徒たちを惹きつける教育とは？平岡英語の真髄に迫った。



## 自由なスタイルで授業に集中できる環境

絨毯の上に頑丈なイタリア製のローテーブル（座卓）。自由な姿勢でテーブルを囲む生徒たち。テキストやプリントの横には、各自用意した飲み物や軽食が…。学習塾



平岡塾 後藤 國彦 講師

のイメージとはかけ離れた雰囲気。それが平岡塾のスタイルだ。一般的な講義のようにすべての生徒が同じ方向を向いているのではなく、講師が生徒たちの間に入っていき、活発な質疑応答が展開される。「現代の寺子屋」といえるスタイルには塾独自のこだわりがある。「平岡塾では発足当初から他人に迷惑をかける限り最大の自由を与え、講師が生徒の目線に立って指導することを実践してきました。それにはこの寺子屋スタイルが最適なのです」

多くの生徒の指導に携わる後藤 國彦 講師

藤田 彦 講師はこのように語る。

## 「教えてもらう」のではなく「学ぶ」意識が生徒を伸ばす

中学1年から高校3年までを対象としている平岡塾。その学びを追ってみよう。

まず入学時。平岡塾ではすべての生徒に門戸を開放しており、入塾テスト等は実施しない（高3生以外）。中1生で最も大切にしてるのが、「自ら学ぶ」意識の修得だ。

「なぜ塾に通うのか、何を学びたいのか。それが明確になれば、何も言わなくても自発的に宿題をやってきますし、授業にも真面目に取り組みむようになります。もちろん、気づきのタイミングは一人ひとり違いますから、誘導

## 古典的名著を用いた授業は、毎日が真剣勝負

しすぎないような心がけていますが、生徒が「塾に通うのが楽しい、自分から学べば新しい世界が広がるかも」と思ってくれば、我々の使命の何割かは果たせたようなものだと思います」（後藤講師）

もう一つ、大切にしているのが生徒と1対1で向き合う「お帰り問題」。授業の終盤に課題を与え、できた人から帰宅できるという制度だ。生徒一人ひとりのコミュニケーションにより信頼関係が生まれるという。

1週間に1回の授業は、休憩をはさみながら3時間〜4時間半に及ぶ。毎回の授業で読解、文法、英作文それぞれB4版1〜2

枚の宿題プリントが配付され、次の授業はその答え合わせから始まる。そこで発音、文法、単語など一つひとつ細かくチェックしながら、関連する知識を重ねていくのだ。使用する教材は、イギリスのパブリックスクールの生徒が読んでいた古典的名著が中心で、良質の英語を暗誦・精読・多読していく。たとえば中1・2が挑戦するのは『ドン・キホーテ』や『八十日間世界一周』。中3からはモーム、ラッ

セル、オーウェル、デカルトなど、音調・修辭・内容の点で定評のある作家の本を徹底的に。また毎授業40〜50分間、外国人講師によるリスニング、スピーキング、ディクテーション、ライティングも実施している。

授業で展開されるのは、単に英語の知識だけではない。

「文法、単語のニュアンスの違い、アメリカ・イギリス・オーストラリア英語の発音の差：英語にはさまざまなアクセントがあり、英語圏の文化・文明などとも大きな関連があります。ですから授業では、そうした面にも意図的に触れるようにしています。例えば英語の文章では等位性が重視されますが、これは建

## 英語10の学びが一生使える英語力に

最後に、平岡塾で学んだ卒業生



寺子屋スタイルの授業風景。生徒たちは自由な雰囲気の中で学ぶ楽しさを知り、「自ら学ぶ」意識を高めていく



平岡塾で使用している教材。ラッセル、オーウェルなど、古典的名著の名文が中心だ



筑波大学医学群医学類5年生 翠川 晴彦さん

の声を紹介しよう。現在筑波大学医学群医学類5年生の翠川晴彦さん。平岡塾の6年間は、哲学など英語を通して幅広い視点に触れたことが印象深いという。

「英語を学ぶ場ですが、+αを得られた気がします。英語の塾で哲学の議論ができるなんて珍しいと思いますし、先生方が授業の中で話されるミニ知識が、全く異なる場所で役立つとか。また授業の前後に講師室を訪ねて先生方と話したり、仲間と刺激があったり私にとって平岡は知的好奇心を満たすサロンのような場所でした」

英語の論文に触れる機会が多い翠川さんだが、抵抗なくスムーズに入っているという。平岡での学びが、確実に実を結んでいるようだ。